

200頁足らずの本書に望むことはアンフェアかもしれない。むしろそれは、『マンガと児童文学のくあいだ』(大日本図書)、『マンガ批評体系』(平凡社)、『子どもマンガの巨人たち—楽天から手塚まで』(三一書房)などの竹内氏の他の著書に求めるべきであろう。だが、本書を入門書にして新たな子ども研究に取り組もうとする者の一人として、評者自身の課題を明記するつもりであえて提起しておきたい。

深谷昌志著

## 『親孝行の終焉』

黎明書房、207頁、1995年1月

萩原 元昭(群馬大学)

超高齢化や少子化傾向の顕著な現代社会のしかも世紀末に、このようなショッキングなタイトルの著作が刊行されたことで、親孝行とは何かについて改めて問い直す好い機会が与えられた。深谷氏は『学歴主義の系譜』や『良妻賢母主義の教育』など優れた労作を世におくりだした著者だけに期待にわくわくするものがある。その意味では『親孝行の系譜』から読み始めるのも一案である。

著者は親孝行を親に対して子どもがとるべき基本的な態度の総体として捉え、そのイメージとしては「恩のある存在」「恩は家のため」「貧しさが孝行を誇張」の4つのキーワードをあげている。親孝行のルーツについては、江戸末期以降では中江藤樹、貝原益軒や室鳩巢ら儒学者の著作に求め、「親=孝行の対象」や「孝行こそ人倫の第一」という見方が共通していることを確認している。さらに孝のルーツを、孔孟の思想(論語など)や古典落語の「火事息子」や「唐茄子屋」に求め、「孝とは親を敬う態度」や「どの子も時がくれば親孝行を尽くす」という当時の社会通念を引き出している。親孝行の観念の伝達については、明治初期の学制時には、学校で孝行を説く内容はほとんどなかったが教師が儒教の孝え方を身につけた旧士族層が多かったので、「隠れたカリキュラム」として孝行の観念が子どもに伝達されていった過程、さらに、西洋化教育への批判としての「教学大旨」や「幼学綱要」それを引きつぐ「小学修身訓」や「小学修身」において孝的教育が強化されていった過程が明晰に語られている。

孝を基本に忠に結びつけ忠孝一本の道を具体化したのは教育勅語であるといわれている。また日本の孝は、親への孝養を修身で伝達するだけでなく、民法の家制度への参入により、絶対的父権が相対化され、先祖教という独自性が消失する危機を明示する上で寄与したという指摘は鋭い。この家族国家観は孝行を、小さな孝(親孝行)と大きな孝(忠君)に分化し、矛盾した場合には小を捨て大をとるという大義名分思想を芽生えさせることになる。井上哲次郎は国民道徳論の中で家長が先祖の代表として統率する個別家族と君臣上下相互に家族的关系をなす形で社会が構成される統合的家族制度とに分け忠孝の一体化の方向を示したが、これは丸山真男の私的世界(孝)の公的世界(忠)への延長傾向を表わすものと孝えられる。

明治43年には国体の精華など忠君愛国的な内容が登場、昭和16年の文部省の「臣民の道」では「忠あつての考で、忠が大本である」という忠上位の観念が形成されてくる。

第二次大戦後、国家主義的な体制の中心をなしていた家制度や天皇制のあり方が問題になり、日本社会の民主化過程において、孝は家制度や忠から解放され、制度上は、明示的なハイアキカルな性格を帯びたものから暗示的implicitなものへ変化したことが示されている。著者は第二次大戦後、孝行を支える論理も見出せず、積極的にも説かれず、批判もされず、いわば真空状態の中に経過し、忠孝一本的な親孝行は終焉したと見ている。

新しい親孝行の創出については、Ⅰ、親に依存する子供たち、Ⅱ、親にとっての子ども、Ⅲ、諸外国に親子の姿を求めて、さらにエピソード「親孝行のゆくえ」の中で、豊富な内外の調査結果や資料を駆使して、その姿を探索している。現在の小・中・高校生の親に対する態度では、父親を尊敬するものが4～5割あり、特に子供の世話をする父親が高く評価される傾向がある。家庭全体が父親中心から子ども中心に変わり、小・中・高校生のいずれも親への依存性が強く、自立性にかげりが見られる傾向が指摘され、この実態から著者は、親に頼りすぎている小・中・高校生にとり、親のために何かするという孝行は無理ではないかと問題を投げかけている。他方、親の方は小学生を持つ親の7割が「子どもとの同居や世話になる気はない」と子どもに期待していない。外国での親子関係の調査結果によると、ソウルでは韓国の子どもが親の献身的な教育熱心に応え、一流大学進学を目指し孝行しようとしている姿が報告され、中国では一人っ子政策の割には子どもたちがたくましいこと、日本に比べて親を自分が家で世話する比率が高い事態が、またアメリカでは多様な家族形態であることと、子が別々の生活を営んでいるため、日本的な意味での孝行は存在しないという指摘がなされ、興味深い。

著者はこれからの親孝行について、日本、韓国や中国のように親が子どもに尽くし、子供が親のしてくれたことに感謝の気持ちを抱き、親のために役立つ親子密着型から、親と子が別々の生活を始めるのを前提とし、親は一定期間子育てをするあいだに子どもの自立を図るという分離型へ移行しつつあること、さらに将来は親子が距離を保ちつつ交流する共存型への移行を提起し結びとしている。

本書は「親孝行」に関心を持つ研究者にとり必読書であるだけでなく、親子の世代間ギャップ、いじめや不登校など子どもの問題、親と子のコミュニケーション、父母の役割や家族など、子どもや親を支援する理論の構築や実践者に広く一読をおすすめしたい。豊富な資料・文献の明快な分析と考察から読者の関心にあった多くの示唆が得られるはずである。